

玉林寺の多聞天（左が阿、右が呬）

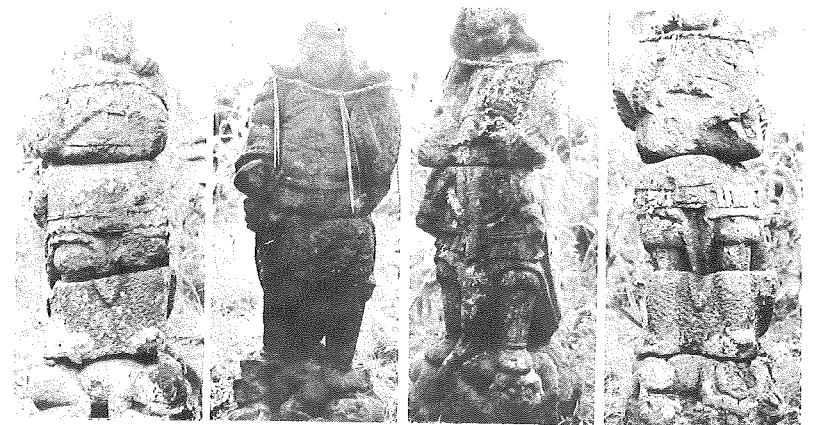
の軸部の四面には東方に阿閼あつちやう、南方に宝生ほうじやう、西方に阿弥陀あみだ、北方に不空成就ぶくうじゆじゆ（釈迦）の四方仏が刻まれていたらしいが、ひどく磨滅していて現在では判然としない。四天王は仏教が起る以前からインド人の間に信仰されていた神である。聖なる山として須弥山の頂上に住む帝釈天の眷属で、山の中腹の四方にある門を守護する神とされている。その後仏教的世界を守る神として、密教的信仰が発展した。池上の四天王は現在、神として祭られている。

2 玉林寺の多聞天（出羽）

玉林寺山門の手前両側に「阿呬あうんの多聞天」と呼ばれる石像が建っている。多聞天は四天王の一尊で、「毘沙門天」とも呼び、帝釈天の眷属である。

四天王が仏教守護の神とされているから、ここの多聞天

年月の間風雪にさらされて一見石塊のように見えるが、よく見ると邪鬼じやくきを踏まえて目もと口もとに厳しい表情があり、守門の護法神にふさわしい様相をしている。邪鬼はユーモラスな表情である。中央の多宝塔の軸部は三層になっており、屋上の相輪は宝珠型で、塔礎や屋根には飾り彫りを施してある。初重



多聞天王（北） 増長天王（南） 広目天王（西） 持国天王（東）

一一 石塔婆類

町内の石仏や石塔を訪ねて歩くとその数は意外に多く、様々な形をしたすばらしい芸術品も各所に見られる。長い年月風雨にさらされ、路傍の石同様雑草の中にほこりを浴びたまま忘れ去られている石仏があったり、社寺境内に移されてささやかながら今なお信仰の対象になっている石仏など雑多である。ほとんどもが風化甚だしく、紀年銘さえ判読困難な物が多いし、又自然石そのものもあるが、いずれも遠い昔祖先達が信仰の対象としたものばかりで、原始信仰の息吹いきぶきさえ感じられる。

1 四天社（池上）

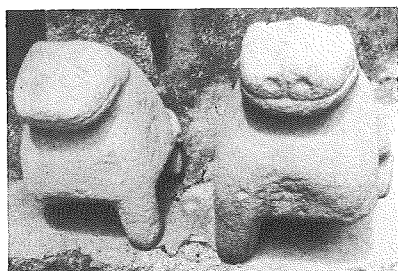
池上部落の北部、榎田へ通じる道路の北側に小高い築土の上に四天社があり、土地の人は「しつ天さん」と呼んでいる。中央の多宝塔は大日如来だいにちくわらいを祭り、それを囲んで四隅の石像が四天王である。東方には持国天じこくてん、南方には増長天ぞうじやうてん、西方には広目天こうもくてん、北方に多聞天たもんてんの順に建っている。四尊像は等身大に近く、長い

で、宗派の区別なく信仰され、特に子供を亡くした親には唯一の仏で、この仏像によだれかけをかけた



広坂の地藏

に最も親しまれているのが地藏である。丸い頭で僧衣を着、地藏袈裟を着け、右手に錫杖、左手に宝珠を持つのが普通で、まれに座像のものもあるが立像のものが多く、地藏菩薩の地藏の意味は、仏への可能性を蔵するという事で、この世でも利益を与え、あの世でも救済するといわれたの



貴船神社堂内の肥前狛犬 (西山田)

犬とも獅子ともつかぬ唐獅子の形をしているが、狛犬は神の使いともいわれている。千仞の谷底に落した子がい上ってくるのを待つ姿や、まりにたわむれるものなど形は様々である。平安の昔に始まったようで、口を開いた雄、口を結んだ雌が相対して社前に向かい合っているが、町内にあるものの多くは江戸時代の作であろう。これが社前に置かれているのは邪鬼が神に近付くことを塞ぐ意味が本来のものであるが、そうした信仰よりも社前のアクセサリー的傾向が強くなっているようである。

4 地藏

町内の路傍に、あるいは社寺の境内に最も多く見られ、又最近では交通事

故でなくなつた場所等にも新しく地藏が建てられるなど、民衆



尼寺印鑰社の狛犬 (伝)



同 (阿)

も寺門を守る護法神であることには間違いない。

元禄十六年(一七〇三)三月吉日の銘があるが二百七十年を経た石像にしては風化も少なく、鎧を着けた武人の姿はのみの跡も見事で、石像美術のうえからも貴重なものである。

「阿」とは口を開いて出す声、「伝」とは口を閉じて出す声で向かって左が阿、右が伝の姿である。邪鬼を踏みつけた忿怒(怒り)の形相と、常に怒声を発していかなる邪神をも近付けない様相がよく表われている。邪鬼を踏まえた像は四天王の外に庚申さんの主尊である青面金剛にも見られるが、この邪鬼を「天の邪鬼」といい、これが暴れ出すと風邪がはやるから踏み付けているという説と、邪鬼は地震を起こす暴れ者とか、作物を荒す鬼とかいろいろの説がある。

3 狛(駒)犬

多くの神社の前に建てられているのが狛犬である。一方は口を開き他方は口を閉じている。「コマイヌサン ア、コマイヌサン ウン」と、戦前小学校一年生の国語教科書にもあった。

り、仏飯を供えたりして、亡児の冥福を祈る姿はよく見かけるものである。子供と地藏とのつながりは賽の河原で、死んだ子供が淋しく石を積んでいるのを救うという地藏の大慈悲心に対する祈りからである。

地藏信仰の始まりは中国から日本へ奈良時代に伝わったようで、後世になっていよいよその信仰は強まり、江戸時代になって完全に庶民の仏となった。子育て地藏、子守地藏、いぼとり地藏など民話や伝説を伴ってきたのも、地藏が民衆に親しまれ育ってきたことを証明している。

町内で最も古い地藏は大願寺裏山の真手地藏で、約五百六十年前の応永年間の作である。(古代「健福寺」の項に写真掲載)又大きいのは広坂の一・五メートルの地藏ではなからうか。この石仏の台座土中の玉石に万部経が奉納されている記録があり、祈ればいぼとりにご利益があるといわれている。

(1) 六地藏

一石に六体の地藏を彫りつけた六地藏やその上部に六観音を彫りつけた六観音六地藏は町内に多く見かける石仏である。特に寺や墓地等に建てられている。六地藏尊像はいろいろの種類があるが普通、

- (1) 地藏——大定智慧地藏——左手宝珠、右手錫杖
- (2) 餓鬼——大徳清浄地藏——左手宝珠、右手与願印
- (3) 畜生——大光明地藏——左手宝珠、右手如意



池上の六地藏の福地

- (4) 修羅——清浄無垢地藏——左手宝珠、右手梵篋
 - (5) 人間——大清浄地藏——左手宝珠、右手施無畏
 - (6) 天上——大堅固地藏——左手宝珠、右手経冊
- の姿をしており、亡者が六道にあつて良い世界に生まれ変わろうとする苦しみを救ってもらうためそれぞれの地藏に願う現われが六地藏となっている。町内で紀年銘のわかつている古いものは次のとおりである。

横馬場光明寺(廃寺)跡天文二年(一五三三)

今山徳運寺(廃寺)跡 天文三年(一五三四) 七月、久留間蔵福寺境内 永禄四年(一五六一)

川上宿裏(北側) 天正五年(一五七七) 八月、同(南側) 六観音六地藏 天正七年(一五七九)

観音、地藏合体の信仰は鎌倉中期ごろから行われていたといわれるが、この種のものには外に駄市川原の北村天満宮境内、玉林寺境内、上戸田宝円寺境内、大願寺公民館東側等に見られるが探せばもっとあるだろう。池上地藏福寺境内の六地藏は角柱で、正面と裏面に二体ずつ両側面に各一体が彫られている。

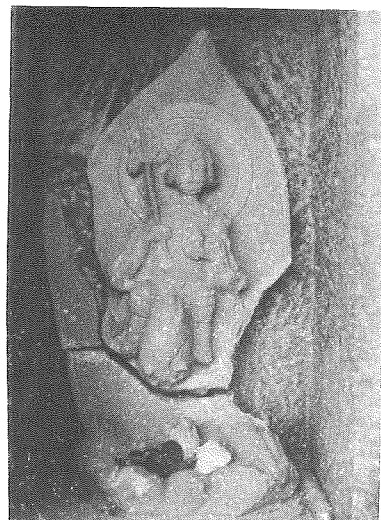
六地藏建立の趣旨は、多くは二世安楽や冥福を祈念したものである。個人で建てたりあるいは久留間や水上の六地藏(享保九年(一七二四))のように「村中」で建てたものもある。川上宿裏にある天正五年の六地藏は妙林禅尼のためと判読され、天正七年の六観音六地藏は天文十四年(一五四五)正月、淀

姫神社境内で謀殺された龍造寺一門（家純、家門、純家、その家来達）の霊を慰めるために建てたことが定説のようになっていたが、石柱を見ると「天正七稔、為道縁禪門、十七回忌、十一月廿七日」の刻字が判読される。この年忌を逆ると永禄四年（一五六一）に相当し、この年は都渡城、川上宿一帯で神代勝利と龍造寺隆信の両軍が決戦した年である。この戦に関係あるかどうかは不明だが、今までの言い伝えとは関係なさそうである。この六地藏は始め淀姫神社の境内にあったものを宿裏三方道に移し更に現在の地に移し変られたものである。

(2) 勝軍地藏（愛宕様）

甲冑武人が馬に乗った姿のものを勝軍地藏又は愛宕様と呼んでいる。当町では駄市川原の智徳寺境内に愛宕さんと称して祭られている。明治二年（一八六九）の建造で、この種の石神は町内では珍らしい。

京都愛宕山の將軍塚に地藏を祭ったのが始まりで、將軍が勝軍になったのはその名の縁起をとってのことであろう。伝えるところによると忠臣蔵の大石良雄は吉良邸討入りの成功を勝軍地藏に祈ったという。昔、朝廷を始め武家の間でもこれを祈念すれば必ず勝利を得るとして信仰されていたようである。智徳寺愛宕さん



勝軍地藏（智徳寺）

への参詣者に受験生が多いのは合格必勝の功德を念ずるためであろう。

5、観世音（観音さん）

略称を観音とっている。慈悲心が厚く衆生をもれなく救うために現われた菩薩とされ、現世利益の靈験あらたかであるといわれてその信仰の範囲は広い。その姿は一般に蓮華を持つのが普通である。観音の種類には聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、不空絹索観音、如意輪観音と様々でこれを六観音と呼んでいる。駄市川原小林寺の千手観音石仏（明治二十年造）や玉林寺参道の如意輪観世音石仏（明治二十三年造）、大久保弁財天社の如意輪観世音等町内では珍らしい存在で一般には聖観音の石仏が一番多い。玉林寺本堂前にある観世音石仏は寛文三年（一六六三）二代藩主鍋島光茂が初代勝茂の菩提を弔って寄進したものである（玉林寺の項に写真掲載）



大久保弁財天社の如意輪観音

観音の霊場三十三か所を巡拝する風習は平安の昔から行われ始め現在もなお続けられているが、それは観世音菩薩が三十三身に姿を変えて信仰者を救済することから始まっている。実相院境内の西側にある三十三か所には、三十三体の観音石仏が並んでいるが、巡拝の労を省くためであろう。城崎の養父社には安政三年（一八五六）作の日月観音が、尼寺の印鑰社には



馬頭観世音（宝塔山）

安政四年造の雲上の観音石仏が建てられている。

木造では健福寺本尊の千手観世音、北原の最明寺観世音、実相院観音堂の十一面観世音、宝塔山親正寺の聖観音等で、最明寺観世音の本尊は本来木像であったが腐朽甚だしく、信者によって石仏に替えられている。実相院観音堂の十一面観世音は専門家の鑑定で藤原期（平安朝）の作といわれる。（三、木像と金像の項）

(1) 馬頭観世音

その名のように頭上に馬頭をいただいているが、当町北原のブロック堂内には弘化三年（一八四六）になる三面六臂（三面に六本の腕）の立像が安置されている。右上手に宝珠、下手に錫杖、左上手に鏈、下手に斧を持ち、中央の二臂は合掌している。正面頭上に馬頭をいただいた手の込んだ石像である。

都渡城の宝塔山には陸軍大佐堤清氏による日清日露戦死馬頭観世音の石仏が明治四十年（一九〇七）に建てられている。自然石になる馬頭観世音は町内各所に見受けられる。

馬頭観世音は六観音の一つで、畜生道に落ちた死者を救うといわれたが、いつからか牛馬の守り本尊とされ、死馬牛の供養や牛馬の安全祈願から人間の交通安全祈願にまで及ぼしている。

6 五輪塔婆

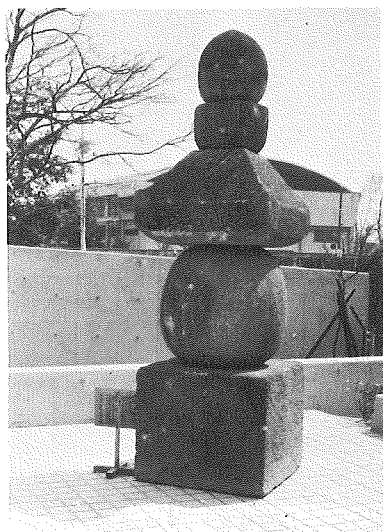
五輪塔は密教（真言）で創始された塔形で、我が国では平安期中期以後から墓標として用いられ、武将や名僧の墓に多く見られる。その形は下部より方、円、三角、半月、団形の五輪からなり地輪、水輪、火輪、風輪、空輪を表わすものとされている。

(1) 鎌倉さん

春日の高城寺墓地である前隈山頂上に建てられていたが、今は県立博物館に移されている。文永七年（一二七〇）執権北條時宗が敷地山林を寄進し、久池井の地頭である国分次郎忠俊が高城寺を創建したことは歴史篇で述べたが、この五輪塔は「鎌倉さん」と呼ばれていて、国分次郎忠俊の墓ではないかといわれている。鎌倉時代後期の作で、優美な格調高い五輪塔として、県内では他に比肩するものない価値の高いものである。

(2) その他

水上の万寿寺（お不動さん）の墓地正面の五輪塔は当寺開山の神子和尚の墓である。江熊野の神変社境内にある五輪塔は江戸初期鍋島直茂に仕えた武将松田茂久の墓である。（文化財、史跡の項掲載）



鎌倉さん（県立博物館蔵）



蚕神さん (実相院)

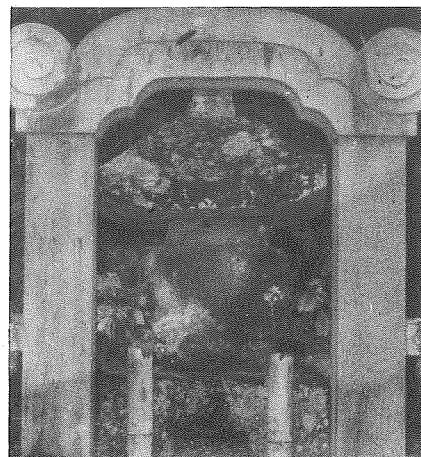
7 蚕神さん

実相院の中門右手に大きな石像がある。女神の姿をしており、左手に繭まゆを持ち、右手には絹糸の束を持って馬のそばに立っている。又、大久保にあるのは女神が馬に乗っている半身像で、大正十五年に建立されたものであるが、これは「蚕神」とはつきり刻んである。

蚕については、魏志ぎしの「倭人伝わじんでん」に邪馬台国やまたいこくでは「桑を植え、蚕を飼かい、絹をつむぎ」と記しているので、我が国は古くから蚕を飼育したことは間違いない。養蚕は中国から伝わったものと考えられている。蚕神は馬とどういふ関係があるだろうか。これについては安田徳太郎著「人間の歴史」4の中から要約すると次のとおりである。

群馬県の養蚕地では、蚕室の壁や天井てんじょうに「馬頭観世音」と書いた札をはってあったそうだが、そのいわれは「馬は跳ね上がるから、早くあがるじょうぞく（上簇）ようにカイコは午うまの日に掃はき立てる」ということからきているという。しかし、これだけでははつきりしないが、中国の「凶経」という本に

『大昔、中国の「蜀しよく」という国に一人の娘がいた。その娘の父が敵に捕えられて獄ごくにつながれたので、そ



神子和尚の墓 (万寿寺)

東古賀の延喜社えんぎには二石造りの小五輪が群をなしている。かつて、延喜社の北方の地に行鎮寺ぎょうちんじという寺があり、戦火のため全焼したので寺地にあった墓を延喜大王を祭る延喜社の境内に移転したという伝承がある。

延喜社のことについては、一、史跡の23のところを参照されたい。



延喜社の小五輪

佐保の兵動八幡宮の前にある墓地にも中世以降活躍した兵動氏武将の墓と思われる五輪塔がある。

の妻が、夫を救い出した者を娘の婿にするふれた。この時この家に飼っていた馬がこれを聞いて四、五日の後、夫を救い出して帰ってきた。そこで馬は約束どおり娘の婿になれると思っていたが、父は「これは人間が助けた時の話で、別に馬と約束したわけではない」といった。馬は気が狂ったようになり、家の中にあばれ込んだり、娘のたもとをかんだりするので、父は怒って馬を射殺し、その皮をはいで庭にさらしていた。するとどこからともなく一陣の風が吹き起り、その皮が舞い出して、庭にいた娘を巻き込んで空高くとび上ってしまった。十日ばかりしてからその皮が飛んできて、庭の隅にあった桑の大木の枝にかかったかと思うと、その皮の中から一匹のカイコが出てきて桑の葉を食べ、やがて繭をはった。その糸をとって機にかけてたところ、美事な絹織物ができあがった。ところがある日、その木の上で美しい音楽が聞えるので見上げると、そのカイコはいつの間にか元の娘の姿になり、例の馬にまたがり、前後に数十人の男女を従え、父母を見ながら「義を重んじて約束を忘れず、馬の望みに従ったので、自分は天帝のそばにいて天人の群に加えられた。どうか安心されたい。この度は御用を終わりに天に帰るが、重ねて天下る時は、あまねく徳を施そう。」というやいなや天へ上ってしまった。夫婦はそれから馬のくれたカイコを飼って、蜀の人々に養蚕の技術を教えた。そして毎年カイコを飼う者が近所からおしかけて、この娘を崇めたが、後にはこの娘を像に刻んで、馬の皮を着せ、馬頭娘と名づけて、カイコの神とするようになった。』

という伝説がのっている。この伝説はカイコや養蚕技術と共に、中国から古代日本に伝わってきて、

日本ではこの馬頭娘が蚕神として、養蚕家の信仰となったのではないだろうか。



8 榎垣塔 (高城寺)

多くは凝灰岩等の軟かい石で屋根瓦や柱等が木像塔のように細かに彫刻され、桃山、江戸時代の庭園等に使われた。元来は仏舍利(釈尊の骨)を納めた塔である。当町では春日の高城寺裏庭に不完全ながら一基と、池上四天社の中央大日如来である。この榎垣塔は基礎と第一層の軸部と二つの屋根が残っているが、第二、第三層の軸部や九輪はなくなっている。

9 金精さま

自然石又はこれに人工を施した男根、女陰の形をしたもので、男性・女性の象徴を神として祭ったのが古い昔から日本の、特に僻地山村に多く見られるようである。当町ではこの両方を兼ね備えたものが松梅の梅野神社境内にあり、又淀姫神社の藤棚の下に男根をかたどった雄大なものが横たわり、土地の人は○○○○石と呼び、淀姫さんが女神だからと意義づけている。井手原の弁財天社にも見られ、松梅小学校傍らの天満神社にも石段を上りつめた右側に立っている。

金精さまは本来、性の神でそれが生産神となり、所によっては邪悪の神を塞ぐ塞神としても祭られた。

形からみて初め、庶民の縁結びの神であったのが次第に性病平癒祈願の神となり、金精さまや勢玉尊などと呼ばれるようになった。やがて地方によっては、子宝に恵まれぬ婦人がひそかに肌を接すると子宝を得るといふ信仰にまで発展した。原始時代から石や樹木や山そのものに神霊がこもると信じ、特に石に寄せた信仰は根強かつたよう、自然石が異常な形をしているものや巨岩等により強い神性を認めていたようである。

10 弁財天

当町では大久保に弁財天があり、又井手原の国道二六三号線の傍ら高段に弁財天を祭る社がある。井手原弁財天社の拝殿の奥には高さ一・五メートル、幅約一メートルの自然石及び高さ一・八メートル、幅一・二メートル余の石の小蔵があるが、その小蔵に次の文字が彫りこまれている。

井手原弁財天社の楯

辨財天尊天座殿乙宇募縁造立秋天下和平民安樂
天明七丁（一七八七）未四月上巳日 真手山健福寺法師姉
実識

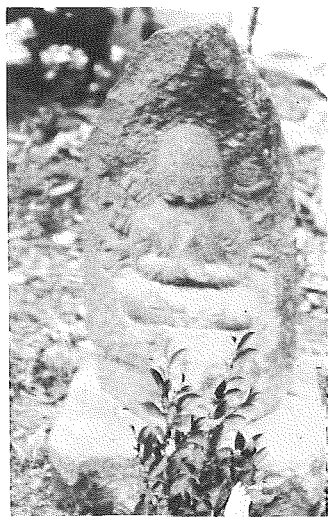
昔、この弁財天の下の淵で、筑前の国の商人が牛に塩を荷なわせて渡る時転んだので「塩びたしなたか淵」といったという。そこでこの弁財天を「塩びたしの弁財



天」ともいい、奥の岩石の割れ目に白色や茶色等の蛇が棲息していると伝えられている。毎年旧四月の第一巳の日には、農家は豊年祈願のため参詣者も多かったという。弁財天は妙音天又は美音天とも称し、歌詠・音楽を司とる神とされ、あるいは福德、智慧、財産を与える神として七福神の一に数えられている。その姿は頭に蛇を巻き琵琶を弾く美女の絵が多く、海辺、河辺、池のほとりに多く祭られ、白蛇がその使者だと言われている。古人は蛇を水神としていたようで、蛇と関係を持つ弁財天も多く水辺に祭られたのであろう。井手原弁財天社の拝殿の楯はよく見ると「白蛇」という字をかたどっているようである。

11 荒神

「荒神さんは荒神さんで家の回りに夜小便をすると回り荒神にとがめられる」とか「旅に出る時は荒



神 荒
(大久保、堤辰雄氏宅地内)

神さんを拝んで行けばあやまちをしない」とか子供の時からよく親にいわれ恐れていたものである。荒神は一般にかまど神としてくどの近くに神棚を設け、かまどの形を粘土で作り神棚に上げており、家ごと祭られている場合が多いが、地荒神として屋敷内に祭っている場合もある。石神としての荒神は当町では稀であるが、大久保の堤辰雄氏屋敷の入口にある石神



文珠菩薩（玉林寺）

は青面金剛といえはいえないこともないが荒神の石神ではないかとも思われる。その姿は三面八臂で弓、矢、劍、矛等を持った立像である。頭は一見馬頭観音風に見えるが馬頭ではなく、髪の毛が焰のように逆立った髪である。荒神を信仰すれば福祿を与えられ長生きが出来るとか、一家和合の神とか、火の用心の神とか、けがあやまち等の災難を免かれる等その功德を信じて、正月にはくどの形をしたナマコ餅を供えたり、農家では稲束三ばを供える所もある。

12 文珠菩薩と普賢菩薩騎象像

出羽の玉林寺本堂前に観音像の中にさはんで、北に東面して獅子に座った文珠菩薩の石像と、南に経巻をひもとき象に座った普賢菩薩の石像が安置されている。この二尊は菩薩の最上位にあるとされ、この両菩薩が釈迦如来の脇持として配されたのも、この両尊が理（普賢）と智（文珠）を司どる仏だからであろう。



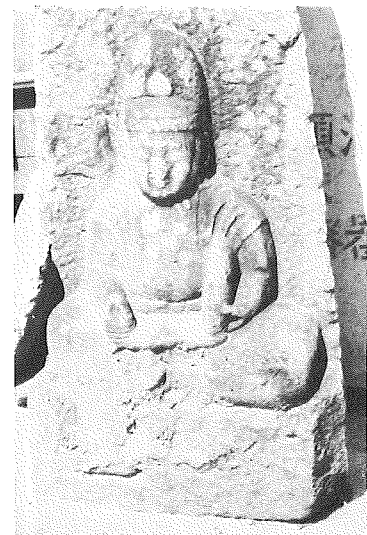
普賢菩薩（玉林寺）

玉林寺の二石仏は文祿の役（一五九二）の際に朝鮮から持ち帰ったものと伝えられている。しかし、二仏は構造、様式が全く違っていて最初から双体の物であったとは考えられない。文珠菩薩は異様で日本在来の彫像とは考え難いから、朝鮮伝来と伝えられているのはこの文珠像ではないかと県文化課調査官木下之治氏はいっておられる。二仏としてよく整った、しかもおだやかな感じの様相をしている。

13 大日如来と天照大神

大日如来を「マカビルシヤナ」といい、真言密教では光明に輝く絶対の仏の意としている。金剛界大日如来（智法身）と胎藏界大日如来（理法身）の二身があつて、共に宇宙万物を育てる仏であるとされている。大日如来は高く髪を結い天衣をまとい、宝冠首飾り等をつけた美しい姿である。日本人は古来水の神、風の神、火の神、山の神等のように自然を崇拜してきた。民間信仰では日輪を仏としたのが大日如来で、神としたのが天照大神である。今なお朝起きて東方に向かい拍手して拝むのは日輪信仰の姿である。庶民の信仰の中の大日如来は疫病を退散させる本尊として祭られるようになった。大日如来の石仏、天照大神の石神は町内各所に見られ、平野の権現社境内には「天照大神宮 村中 寛文四年」の紀銘のある自然石が建ててある。約三百年前平野村で建てられたものである。部落によっては毎年四月二十八日「大日さん祭」又は「大日さんごもり」といって今もその祭りが行われている。戦前までは所によって伊勢講田を経営していた。約五百年前の応永のころから京都の公家貴族に始まり、時代が下るにつれ農村へと浸透していった。郷土でも天照大神信者による伊勢講が組織され、祭祀費や伊勢参

りの資金作りに講衆によって共同稲作等が行われていた。



惠比須 (都渡城)



大黒 (尼寺)

14 惠比須・大黒天

鯛を抱え釣竿を肩にした惠比須、打出の小槌を持ち俵をふまえて立つ大黒は路傍の石神としてもまま見かけるが、当町内では惠比須は都渡城宿、尼寺四つ角、大黒天は尼寺印鑰社、尼寺東町、国分南の養父社、八幡宮等外にも探せば幾つもあるだろう。中には自然石の惠比須神や頭巾をかぶり穀物の入った袋を肩にかけた大黒像もある。共に七福神に数えられ福の神、殖産の神として商家では商売繁昌の神として祭っている。

農家では田の神的性格があり、秋の刈上げに田の神として祭っている。大黒が性神として祭られる所もあるらしく、そう言えば後方から見た姿は男性の象徴を表わしているようである。このように信仰は多岐にわたるがいずれも生産に深い関係がある。

15 塔類

国分寺には七重塔(木造)が建てられていたが、河上神社にも三重塔(木造)が建てられていたことが河上神社文書で明らかであるが、現在その塔の心礎といわれるものが、社前向かって左側にあり手水鉢の形をしている。その形状は長径一・五メートル、短径一・三五メートル、厚さ六三センチ(地中の分不明)で造出はなく、柱穴の中央の舍利孔は径九センチ、深さ一〇・七センチである。一般には心礎の周囲に一片が五個の正方形に十六個の礎石が配され、中央の心礎と合わせて十七本の柱によって塔が建てられたのである。大願寺廃寺跡に二つの穴がある大礎石がある。門礎とすれば柄穴と思われ、塔

心礎とすれば舍利孔ではなからうか。門礎にしては礎石が大き過ぎるようである。

(1) 庚申塔

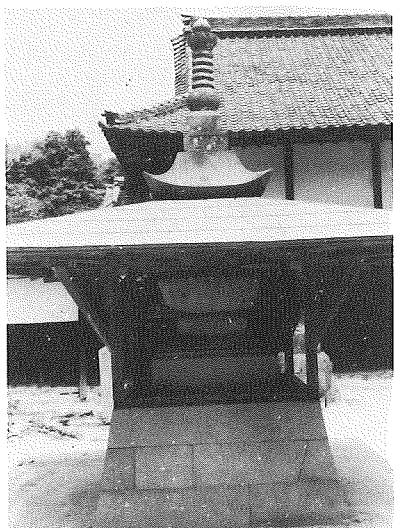
町内の庚申塔には自然石や自然石に「庚申」「庚申尊天」「猿田彦」「青面金剛尊天」等の文字だけのものが多く、中には青面金剛の像を彫り込んだ石神も見かける。庚申の日の晩に、人間の体内に住む三尸という虫が、人間の寝静まるのを待ち、体から抜け出して天に昇り、天帝にその人間の罪状を逐一報告する。天帝はその報告に基づいて様々の罰を与えるという。庚申の日が六十日ごとに来るのでこの晩は庚申の祭をして飲食をしながら徹夜して談笑し、三尸が



塔心礎 (河上神社)



宝篋印塔 (万寿寺)



遺髪塔 (実相院)



青面金剛 (大久保)



庚申塔 (池上)

体から抜け出ないようにするという習わしである。庚申祭は奈良時代貴族間に始まり、鎌倉時代には武家社会にも取入れられ、江戸時代にはこの信仰が農村のすみずみまで行き渡り、このころから庚申塔が建て始められたという。

当町棧敷の猿田彦神社は庚申を主神とした社である。庚申の申と猿田彦の猿を結びつけてのことらしく、所によつては申田彦とも書き、又青面金剛を猿田彦そのものと考えている所もある。青面金剛の神像を彫刻した石像は町内各所に見かけるが、池上のは邪鬼を踏みつけた姿をしており、大久保弁財天社内のは一面六臂の青面金剛で台座に一猿が刻まれている。いずれも町内では珍しい石神である。庚申造立の趣旨の多くは「息災延命」「二世安樂」と記されているが、悪神の進入を防ぐ塞神として村外れに建てられていたものが、後に社寺等に移されたようである。北原部落の三

社権現にある三面六臂の青面金剛尊天(文化十二年一八一五)もその一つであろう。

(2) 遺髪塔

実相院の講堂前庭に相輪屋頂式石造玉塔が建てられている。宝塔建立は納経、供養、逆修(生前供養)の三つの目的があるが、墓標として用いられる場合もある。実相院の宝塔は供養が目的で建てられたもので、遺髪塔と称し基壇に納髪する装置がなされている。建立の年代は不明だが江戸時代と思われる。石垣で基壇を設け基礎、蓮花座、塔身、笠、相輪と全長四メートル余の大宝塔である。相輪は請花、宝輪、宝珠からなり、塔身には四面に梵字が彫られ、四仏を表わしている。

(3) 宝篋印塔

釈迦入滅後百年、印度の摩伽陀国の阿育王が仏舍利を分けて印度全国の八万四千個所に建立したという故

事にならって銅塔を作り、それに宝篋印心呪經を納めて諸国に配したのが我が国にも伝わり、うち一基が筑前大泉坊に旧国宝として残っている。これらが現在の石造宝篋印塔の祖型をなすもので町内には数少ない。今山の聖光寺のは永正四年（一五〇七）正月十五日、水上の万寿寺のは大永二年（二五二二）五月と刻まれている。

(4) 無縫塔（卵塔）

古い寺にはその歴代僧侶の墓に無縫塔又は卵塔という石塔がある。基礎の上に倒卵形の塔身を置いたのが普通であるが、この種の古いものでは実相院墓地や国分寺跡に江戸期歴代僧侶の無縫塔が建並び、

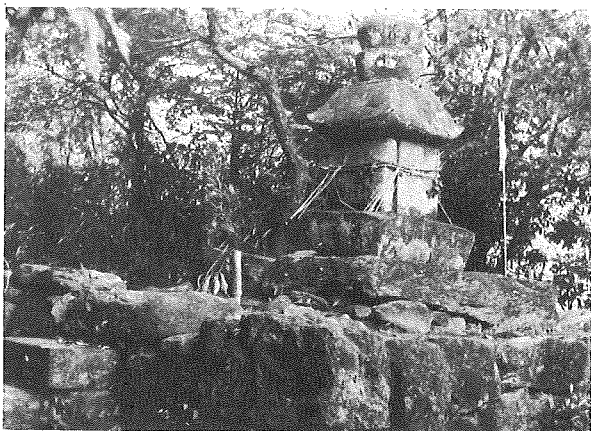


天亨和尚の墓（万寿寺）

松梅地区仲の華藏庵跡には湛然和尚以下の無縫塔が並んでいる。無縫塔の豪華なものには塔身下に請花があり中間に角柱を置き更にその下基礎上に覆蓮を刻んだ石塔がある。町内では水上の万寿地墓地内にある天亨和尚の墓がそれである。天亨は龍造寺隆信の曾祖父剛忠の弟で万寿寺勅願第一世の名僧であった。

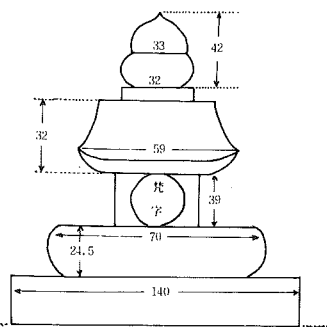
(5) 如法塔

実相院の裏山に如法塔がある。ここは「経塚」と呼んでいる所である。



経塚（実相院）

如法塔の構造



実相院では平安のころより如法經会が始まり現在まで約八百八十年間続けられている。法華經には写經の功德を説いてあるため奈良時代から写經が盛んに行われ平安時代中期になると經卷を保存しようという經塚が流行した。実相院裏山にある經塚は如法經会ごとに僧侶達の写經した法華經とその年の過去帳が納められている。

(6) 月待供養塔

如意輪觀音を主尊とした十九夜待、二十二夜待、二十三夜待がある。井手天満宮には安政五年（一八五八）の造建になる二十三夜待供養塔子ともいい、月宮殿の中に住んでいて月の世界を治める神として信仰されたものである。いずれも月待供養で信者が集まって講を仕立て、男女それぞれ日をきめて集まり飲食談合し、時にはお経をあげて



二十三夜供養塔（北原三社権現）

月の出を待つものである。日の取り方も地方によって違い、昔は十九夜待、二十二夜待講は多く性談をして安産を祈るので産泰講ともいわれ、所によっては片膝を立てた如意輪観音の姿が無痛分娩の姿勢であると信じられていた。月待供養は町内で今なお続けられている所もあり、男は年令に応じて幾組かの三夜待講を作り、女はお六さんと称して組ができ、今は本来の信仰は失なわれて毎月各戸回して場所をきめ、飲食談笑を楽しむという一種のレクリエーションといつてよい。

三 木像と金像

1 高城寺地藏尊

高城寺の本尊は釈迦如来、観世音、地藏菩薩の三尊であるが、その中の地藏菩薩像は地藏木像中の傑作といわれている。胎内背面に「地藏命」の墨書銘があり



高城寺地藏尊

又座具板に

『本物は「うんけいさく（運慶作）」御つくろい（御繕）は「寛文六年ひのうまとし（丙午年）」さいしき（彩色）仕候「京丈仏」仏師□□□□月□□」との墨書銘がある。＊（ ）内は註釈

寛文三年（一六六三）には大木惣右衛門の肥前古蹟縁起があるが、それには当時の寺仏に運慶作とはなかつたらしく、仏師七郎右衛門の推定かも知れない。松材の寄木作りで、玉眼を入れ像の高さは六十八センチ、寛文六年に彩色修理されている。

2 水上懸仏

昭和二十六年六月十二日、当町水上の彦山権現の小祠に奉納されていたものが発見され、県下で知られている懸仏の中で最古の紀年銘を有するものである。全部鑄銅で鏡板は銅板の周縁を更に帯状銅板で縁取りして鉄留とし、上方二か所に獅子咬を付け吊手をつけてある。御聖体は薬師如来像である。左右二個の花瓶の中一個がなくなっている。鏡板の径は約三十七センチ、厚さ約一ミリ、薬師如来は台座よりの総高約一十七センチでその鏡背に

御鏡一面

右意趣者為除平氏女三十三冠

并千代松御前御息災延命

増長福寿心中所願成就如件 敬白

文永八年七月十五日（一二七二）

とあるが、この懸仏がどの寺社に奉納されていたか、平氏女や千代松御前が誰であるかはわからない。

約七百年前の懸仏として、他に類例のない貴重なもので、県の重要文化財に指定され、県立博物館に寄託されている。（扉写真に掲載）